

經濟論叢

第103卷 第6号

EECの域内貿易と関税同盟……………行 沢 健 三 1

企業と労働市場……………赤 岡 功 14

イギリスの戦時財政への移行とその背景……坂 井 昭 夫 32

研究ノート

イギリス式貸借対照表の起源について……………高 寺 貞 男 53

昭和44年6月

京 都 大 学 經 濟 學 會

《研究ノ一ト》

イギリス式貸借対照表の起源について

—B. S. ヤーメイ教授のコメントに答える—

高 寺 貞 男

I

周知のように、ヨーロッパ大陸諸国とアメリカでは、貸借対照表の形式として、借方(左)側に資産を、貸方(右)側に負債・資本を配置するいわゆる大陸式(the Continental form)が採用されている。これにたいし、イギリスとその旧植民地の一部(オーストラリア、インド等)では、今日でも、大陸式とは逆に借方(左)側に負債・資本を、貸方(右)側に資産を配置するいわゆるイギリス式(the English form)が採用され続けている¹⁾が、当のイギリスにおいても、かつて「イギリス会計学が成立した今世紀初頭²⁾に」貸借対照表は「ヨーロッパ大陸諸国や」アメリカではおこなわれているように、資産を借方側において作成させるべきか、それともイギリス[およびその影響下にある植民地]でおこなわれているように貸方側にもってきて作成させるべきかについて、多くの討議がおこなわれた。³⁾

1) 「現在[イギリスでは] 4社中1社以下が報告式の貸借対照表(the statement form of balance sheet)を採用しており、……この形式の使用はふえつつある」(Vivian H. Frank, *Companies Accounts*, 2nd ed., London, 1952, pp. 53-54.) が、慎行にしたがい「勘定形式 (the account or two side form) が用いられる場合、イギリスとオーストラリアでは、すべての借方残高を右側に表記するのが伝統的実務であった。」(R. J. Chambers, *The Function and Design of Company Annual Reports*, London, 1955, pp. 110-111.) なお、イギリスと「同じ〔貸借対照表〕実務はオーストラリアに存在する」(Frank H. Jones, *Guide to Company Balance Sheet and Profit & Loss Accounts*, 6th ed., Cambridge, 1964, p. 12.) ばかりでなく、インドにも現存している。1956年のインド会社「法第211条は、貸借対照表が書式第6 (Schedule VI) または事情がゆるすかぎりそれに近い形式で配列されるべきであると規定している」(S. B. Chowdhry, *Analysis of Company Financial Statements*, Bombay, 1964, p. 38.) が、その場合、左右両側への項目配置はいぜんとしてイギリス式を踏襲している (See *ibid.*, pp. 233-236; M. C. Shukla and T. S. Grewal, *Advanced Accounts*, 6th revised and enlarged ed., New Delhi, 1967, Vol. II, pp. 164-170.)

これにたいし日本では、明治期全般にわたり、貸借対照表の形式としてイギリス式と大陸式とが混用されていたが、大正期に入ってから、ようやく今日みるように大陸式を統一的使用するようになった。この間の詳しい事情については、高寺貞男、「貸借対照表制度導入期におけるイギリス式と大陸式の接合」、『経営史学』第2巻第2号(昭和42年9月)、30-63ページを見よ。

2) イギリス会計学成立の指標としては、1903年から1907年にかけて出版されたジョージ・ライル編の『会計百科辞典』(全8巻)があげられる。

3) Arthur Lowes Dickinson, *Accounting Practice and Procedure*, New York, 1913, p. 36.

この貸借対照表の「2つの形式の相対的メリットについて」の論争は、ほぼ同じ時期にピークに達したドイツの貸借対照表価値(評価)論争にくらべると、「無益な(useless)論争」⁴⁾であったといえるかもしれないが、この貸借対照表形式論争の過程において、イギリス式貸借対照表を擁護する側からその論拠として、イギリス式貸借対照表について2つの解釈が表明されていたことを見逃してはならないであろう。

まず、第1の解釈においては、「この形式の貸借対照表は資産・負債〔資本〕勘定の開始記入をあらわしている。」⁵⁾ といえ、開始「残高勘定にあらわれるかかる再開始記入はイギリス式貸借対照表をあらわしている。」⁶⁾ と説明されている。

では、どうして、イギリス式貸借対照表は「負債〔資本〕が借方側に、資産が貸方側におかれる開始残高〔勘定〕の形式にしたがってる。」⁷⁾ といえるのであろうか。この点について、ディクシーはつぎのように解説している。すなわち、イギリス式決算法(the English method)をとった場合、「帳簿がはじめて開設された時には、『大陸式』決算法(the "Continental" method)の下でと同じように、開始残高〔勘定〕が設けられたことを想いおこされるであろう。それゆえ、最初の貸借対照表が開始残高〔勘定〕の形式をとらねばならないのと同じように、その後のすべての貸借対照表は同じ方式で作成されねばならないのである。」⁸⁾

なお、かかる主張は、閉鎖「残高勘定が……のちに大陸式貸借対照表として採用された。」⁹⁾ という歴史的認識と対になっており、その意味で、貸借対照表の「2つの形式の起源についてのかかる説明は、歴史上〔イギリス式貸借対照表の生成が閉鎖〕残高勘定の使用の衰退と時期を同じくしていないのだけれども、巧妙かつもっともらしくさえある。」¹⁰⁾ と評価されている。

他方、「別の論者達は純粋に論理的基礎にもとずいた説明を試みた。これら〔第2の解釈〕は企業を常に所有者とは別個の実体(an entity)と見なすところの人的勘定理論(the theory of the personality of accounts)に依拠している。ここでは、イギリス式貸借対照表は企業によって所有者へ提供される勘定の報告書(the statement of account)であ

4) Roy B. Kester, *Accounting Theory and Practice*, Vol. II, New York, 1918, p. 65.

5) W. A. Paton, ed., *Accountants' Handbook*, 2nd ed., New York, 1934, p. 15.

ただし、原文では、開始記入(opening entries)が閉鎖記入(closing entries)とミスプリントされているので、訂正して引用した。

6) Kester, *op. cit.*, p. 66.

7) Lawrence R. Dicksee, *Bookkeeping for Accountant Students*, 7th ed., London, 1913, p. 58.

8) *Ibid.*, p. 58.

9) Kester, *op. cit.*, p. 66.

10) Kester, *op. cit.*, p. 66.

ると主張されている。』¹¹⁾そして、イギリス式において「貸借対照表の左〔借方〕側に負債〔資本〕をおく理由は、貸借対照表が所有者やその他の人々にたいする企業の地位 (the position of the business) を表示する報告書であるという点にある。〔その場合〕企業は資産にたいして貸主であり、その負債にたいして借主である。』¹²⁾と説明されている。

ただし、第2の解釈の中には、「企業」の代わりに「経営(者)」を主体にすえて、「この〔イギリス式の左右〕配置は、^{マネジメント}経営(者)がすべての負債〔資本〕を受託し、資産を委託している (the mangement charges itself with all of its liability and credits itself with its asset) という考え方にもとづいている。』¹³⁾と説明される場合もあるが、いずれにしても、上記のような説明は経営と所有が未分化の状態にある個人企業 (single proprietorships) については当てはまらない。そこで、ディッキンソンのように、個人「企業」を「資本所有経営者」といいかえて、「貸借対照表は資本所有経営者 (the owner of the property) の地位を表示しようとするものであるから、彼の所有する物を彼に貸記し、彼の負うところのものを彼に借記すべきであるという理論にもとづき」¹⁴⁾「理論的により正しいとおもわれるイギリス式〔左右配置〕法は『帳簿〔に収容されている実在勘定〕にたいする〔資本所有経営者〕甲 (A in account with his books)』〔の勘定をあらわすもの〕である。』¹⁵⁾と説く論者もいる。

II

さて、ここまで読んできてすでに気付かれた方もあるかもしれないが、イギリス式貸借対照表の正当性を立証するために表明された2通りの理論的解釈には、それぞれ、正当化論の常として、現行的状態にたいする解釈をそのまま過去へ投影したという意味での起源論がひめられている。しかし、2通りの理論的解釈のいずれも、イギリス式貸借対照表がいつ、どこで、どうして (どんな理由で) 形成されたのかという歴史的研究に

11) Kester, *op. cit.*, p. 66.

12) George Lisle, ed., *Encyclopaedia of Accounting*, Vol. I, Edinburgh, 1903, p. 206.

13) Herbert G. Stockwell, *Net Worth and the Balance Sheet*, New York, 1912, pp. 19-20; *How to Read a Financial Statement*, New York, 1925, pp. 9, 12.

14) Dickinson, *op. cit.*, p. 36.

15) Dickinson, *op. cit.*, p. 36.

第2の解釈をとる「イギリス人は貸借対照表を資本所有〔経営〕者が資産を彼に貸記し、負うているものを彼に借記しなければならない〔仮想〕勘定 (the [imaginary] account of owners) と考えている」(Harry G. Guthman, *The Analysis of Financial Statements*, New York, 1926, p. 18 n.) が、その場合、「その外の〔実在〕勘定への記入と反対記入となる資本所有経営者の〔仮想〕勘定 (a [-n imaginary] proprietor account) が、細大もらさず写しとられると、資産(右)・負債(左)という配置となり、イギリス式貸借対照表に符号することは注意するにあたいする。」(A. C. Littleton and V. K. Zimmerman, *Accounting Theory: Continuity and Change*, Englewood Cliffs, 1962, p. 37 n.)

もとずいて、展開されてはいない。ともに、そこには、由来もまたそうに違いあいまいという実証抜きの臆断がみられる。

では、どちらの理論的解釈が歴史的事実と合致しているのであろうか。かかる問いに答えるために、分散した史料を蒐集し、調査した結果、イギリス式貸借対照表は、17世紀の後半に当時の代表的合本会社 (joint-stock companies) によって (具体的には、ロンドン東インド会社の1671年の半公貸借対照表、イングランド銀行の1696年の公表貸借対照表として)、借方・貸方側へ配置する項目を作成=報告主体である企業または経営者を主格として決定する基準にしたがい、形成されたものである——つまり、第2の理論的解釈の方が結果として史実にそった形となっている——ことが確認できた。

そこで、その点を実証する若干の史料をそえた「イギリス式貸借対照表の初期の経験」と題する論文を書き¹⁶⁾、さらに英訳して『京都大学経済学部英文記要』に発表した¹⁷⁾ところ、これにたいし、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンスのヤーメイ教授 (Prof. Basil S. Yamey) から、1969年1月3日付の私信にそえて、当「論文を〔興味深く〕読み、〔そこでとりあげられている論点につき〕熟考することによって刺戟された若干の覚書」をコメントとしておくってきた。以下はその全文である。

Basil S. Yamey, Notes on

S. TAKATERA: "Early Experiences of the British Balance Sheet".

(A) Sections III and IV

The examples reproduced in these sections look like capital (=stock) accounts, and not like balance accounts or balance sheets. Indeed, the terminology used in the examples supports this interpretation. (I assume that the heading "Balance Sheet of Richard Hoare, 1702", p. 39, is *not* in the original document).

The examples of the stock (or capital) accounts are examples of what the stock account would look like *after* the ledger has been balanced and

16) 高寺貞男、「イギリス式貸借対照表の初期の経験」、『経済論叢』、第95巻第5号(昭和40年5月)、23-44ページ；「イギリス式貸借対照表の原型」、『会計』、第89巻第1号(昭和41年1月)、87-106ページ。

17) Sadao Takatera, "Early Experiences of the British Balance Sheet," *The Kyoto University Economic Review*, Vol. XXXVII, No.2, October 1967, pp. 34-47.

closed, and when the capital account has been re-opened by posting to it the balances of the *assets* and *liabilities* as they appear in the balance account (making credit entries for debit balances, and *vice versa*). This particular procedure for opening the capital account after the ledger has been closed is advocated in several eighteenth century texts; e. g. see Richard Hayes, *The Gentleman's Complete Bookkeeper*, 1741, p. 92, where the author writes: "the [said Account [the balance account] being transposed, it will shew the true State of your Stock". Also see, John Mair, *Book-keeping Methodis'd...*, 2nd edition, 1741, pp. 88-89; "And accordingly, in your new Books, the several Particulars on the Dr. Side [of the Balance account] must all of them be made Drs. to Stock, and Stock Dr. to the several Particulars on the Cr. Side". He specifically excludes the last item on the Cr. Side of the Balance account, namely the balance on the Stock account itself. He then shows what the new Stock account would look like. (The relevant part of Mair is reprinted in the book by Yamey, Edey and Thomson cited in (B), below, at pp. 120-121).

Of course, the same effect could be achieved by drawing up—outside the ledger—at any time) a "capital account", consisting of all asset balances (on the credit side) and all liabilities balances (on the debit side), without first drawing up a balance account, or, indeed, balancing the ledger formally. This is very much how Stevin draws up his "Staet". His example (Takatera, p. 38) even has the folio numbers of the accounts, except, appropriately, for the "Rest" (=balance or remainder) itself. This is also true of the Hoare document (p. 39), with the sole difference that there is no folio number for the Cash balance—presumably because the cash entries were kept in a separate cash book, not in a ledger account.

It may be that capital "accounts" of this kind, with asset entries on the credit side accustomed people to the idea that a statement of assets and liabilities, as in a published balance sheet or similar document, should leave liabilities on the left and assets on the right.

(B) In a book published in 1558, the Italian, Casanova, described a system

of closing the ledger and opening its successor. This involved two balance accounts. The first came at the end of the old ledger, and is in the “universal” form. The second appears at the beginning of the new ledger, and is identical with the other balance account, *except that the entries are reversed*. Weddington, writing in 1567, introduced this idea into the English literature. (On this, see B. S. Yamey, H. C. Edey and H. W. Thomson, *Accounting in England and Scotland: 1543-1800*, London, 1963, pp. 114 and 165). This practice was used by some merchants in England (see p. 192 of the same book), and also by the Bank of England in its eighteenth century ledgers.

I suggest that the “British” form of balance sheet *may* possibly derive from this second kind of balance account, which I would call an “opening” balance account.

It is interesting to note that Casanova intended his “opening” balance account to serve as the source from which the opening entries could be made in the various accounts in the new ledger. It seems (from de Waal, p. 275) that the opening entries in the new ledger, according to Stevin, were to be taken from his “Staet”. Also, it seems (according to de Waal, p. 276) that Stevin would have placed his “Staet” at the *beginning* of the new ledger. Thus there are similarities between Casanova’s “opening” balance account and Stevin’s “Staet”; and there are similarities between Stevin’s “Staet” and the kind of opening capital account, in a new ledger, as described by Hayes and Mair.

このコメントにおいて、ヤーメイ教授は、「カサーノヴァの『開始』残高勘定とステフィンの“Staet”との間に類似性があり、しかも、ステフィンの“Staet”と開始資本勘定との間に類似性がある」ところから、「イギリス式貸借対照表は、『開始』残高勘定と呼びならわしてきた第2の種類の残高勘定から派生したものであろう。」という結論を導きだしている。したがって、ヤーメイ教授はさきにも述べた筆者の見解に真向から反対し、第1の理論的解釈の方が結果として歴史的事実とそくしたものとなっているわけであるが、それが教授の見解のすべてではないことに注意しなければならない。なぜなら、かかる結論にいたる途中において、ヤーメイ教授は、ジョン・メイヤー

ヤリチャード・ヘイズが「あなたの新しい帳簿においては、〔残高勘定の〕借方側の各項目は資本 (stock) にたいして借記され、資本は〔残高勘定の〕貸方側の各項目にたいして借記されねばならない。こうして」「残高勘定が〔左右〕置きかえられると、それはあなたの資本 (stock) の正しい状態 (state) を示すであろう。」と説いているように、元帳の再開に際し、資本所有経営者を主格として、借方側に負債記入が「貸方側に資産記入がなされるこの種の資本『勘定』は、人々をして、資産負債表 (a statement of assets and liabilities) が、公表貸借対照表または同様の文書にみられるように、負債を左に、資産を右におくべきであるという考えになれさせたのであろう。」と指摘しているからである。その場合、ヤーメイ教授が、開始残高勘定一般ではなく、資本所有経営者の勘定としてとらえねばならない開始資本勘定に注目して、そこにイギリス式貸借対照表の由来を求めていることから推察しうるように、教授は第2の理論解釈もまた結果として歴史的事実にとっていることを認めているのである。

しかしながら、ヤーメイ教授のコメントは、一貫して元帳の『再開』のための手続を縦糸として、全体があまれている。だから、そこにおいては、『開始』残高勘定にイギリス式貸借対照表の原型を見いだす結果ならざるをえなかったのである。これにたいし、筆者は、期間中（したがって、期末の締切りの際）には、使用されなくても一向差支えないので、省略されてしまい、仮想勘定として元帳の裏面にかくれているが、期首に元帳が再開される際に、一挙に（開始）資本勘定の形をとって実在化する（ただし、簿外決算の場合には、ステフインが例示しているように、資本の状態〔表〕(Staat of capitael) となって表面化する）ところの資本所有経営者の勘定にイギリス式貸借対照表の源流を求めべきである、と考えている。いや、そればかりでない。筆者の考えでは、この資本所有経営者の勘定は、単にイギリス式貸借対照表の源流をなくしているばかりではなく、経営と所有が分離する時点をすぎると、企業経営者の勘定へと進化し、イギリス式貸借対照表の本流となって、現在につながっているのである。

その意味で、筆者は現在でもさききのべた見解を根本的に変えてはいないが、ヤーメイ教授からのコメントに接し、そこで指摘されている開始資本勘定の特性を考慮することにより、さきの見解を補強できたことに感謝している。

III

なるほど、一部の論者も説いているように、会計〔技術的にいえば、〔イギリス式貸借対照表とその他の諸国における貸借対照表との〕相違は、イギリス式貸借対照表が開始残高勘定〔の報告書〕であるのにたいし、世界の他の諸国が〔貸借対照表に〕『閉鎖残高』勘定〔の形式〕を用いているところにある¹⁹⁾としても、「新年度の開始〔残高〕

を示す勘定の方が、旧年度の閉鎖〔残高〕を示す勘定よりも、いくらかでも論理的にすぐれているということを見いだすことは困難である。¹⁹⁾しかし、開始残高勘定を資本所有経営者または企業経営者の勘定の実存形態と解すれば、イギリス式貸借対照表が、この経営者の勘定を伝達する手段として、それを作成（伝達）する主体である経営者を主格の地位におき、作成されてきたことには、それ相当の合理性があったといわなくてはならないであろう。

なお、これまで問題としてきたイギリス式貸借対照表と同じように、作成（伝達）主体を主格として作成されてきた伝達手段として「よく知られた例は、しばしば〔ロンドンの〕銀行家の通帳 (banker's pass book) に見いだされる」²⁰⁾が、この点に関しては、稿をあらためて、詳論したいと思っている。

18) Henry Rand Hatfield, *Modern Accounting*, New York, 1909, p. 43.

19) *Ibid.*, p. 43.

20) Dickinson, *op. cit.*, p. 37.

ディッキンソンは、「顧客の預金が貸方側に、引出しが借方側に記入される通帳」(Dickinson, *op. cit.*, p. 37.) 形式。すなわち、1930年「現在〔イギリスで〕地方銀行を除いて、廃棄されつつある形式」(H. T. Easton, *The Work of a Bank*, 5th ed., revised and re-written by Herbert G. Hodder, London, 1930, p. 61.) を前提にして、説明を試みているが、しかし、「ロンドンでは、〔つぎのように〕顧客の〔元帳上の銀行勘定と同じ〕視点から通帳を記載するのが長い間の実務であった。」(L. Le Marchant Minty, *English Banking Method*, 2nd ed., London, 1925, p. 170.) すなわち、「通帳は顧客にたいし銀行によってあたえられる銀行の地位の報告書 (a statement of the bank's position) であり、銀行家は彼が受取った貨幣について彼の顧客にたいし借主 (debtor) の地位にあるので、〔当座〕勘定へ払込まれたすべての貨幣は通帳の借方側におかれる。〔それとは反対に〕銀行家は彼が支払った貨幣について貸主 (creditor) の地位にあるので、顧客に代って銀行によってなされたすべての支払は貸方側に記入される。」(J. P. Gandy, *The Elements of Banking*, London, no date, p. 67.)